

木此川ニ著ヲ以テ所號也、上古ニハ泉里、或ハ高瀬里ト云々。

〔源氏物語寄生三十二〕いづみ河の舟わたりも、まことにけふは、いとおそろしうこそありつれ、この二月には、水のすくなかりしかば、よかりしなりけり、いでやありきは、あづまちをおもへば、いづみかおそろしからむなど、ふたりしてくるしとも思ひたらすいひゐたるに、ゑう舟浮はをともせでひれふしたり、

〔河海抄宿木〕いづみ川のふなわたり 泉河

木津河をいふなり、日本紀には誂川とあり、と津五音通するなり、崇神天皇發兵、此川を中心にして誂戦ありし故なり、

〔仙源抄伊〕いづみ川 木津川也、元はいどみ川ト云、

〔日本書紀崇神五年〕十年九月壬子、武埴安彥與妻吾田媛謀反逆、興師忽至、○中時官軍、○申進到輪韓河、埴安彥挾河屯之、各相挑焉、故時人改號其河曰挑河、今謂泉河、訛也、

〔中右記〕長承四年○保延元年二月廿七日辛未院羽春日御幸也、○申時著泉ノ生津今度有

〔名所方角抄山城〕京邊土名所 辰巳分

木津川渡 此河は駒野と木津の里との間にながれたる河なり、木津といふは河のみなみ也

泉州 木津に近し、鹿瀬山、瓶原、此等一所なり、

〔京羽二重四〕渡

權井渡 同郡○喜綴 水主村に有、或は泉州ノ渡とも云、

〔三代實錄清和二十八〕貞觀十八年三月三日辛巳、是日山城國泉橋寺申牒曰、故僧正行基、五畿境内、建立四十九院、泉橋寺是其一也、泉河渡口、正當寺門、河水流急、橋梁易破、每遭洪水、行路不通、當在道俗合力、買得大船二艘、小船一艘、施入寺家、以備人馬之濟渡、太政官天長六年、承和六年、兩度下符國宰充